子どもの内在的・究極的公正世界信念の発達

田辺　和奏

【序論】

公正世界信念とは，世界が不当な不運を被ることのない公正で安全な場所であると信じる傾向のことである(Lerner, 1980)。公正世界信念には，出来事の原因を過去の行いによるものと信じる内在的公正世界信念と，不公正が将来的に埋め合わされると信じる究極的公正世界信念の 2 種類が存在する(Maes, 1998)。公正世界信念の発達は詳しく検討されていないが，人物に対して良い（悪い）ことをしたから良い（悪い）出来事が起こった，良い（悪い）ことをしなければ良い（悪い）出来事は起こらなかったと考える傾向が 5-6 歳児頃にみられており(Fein, 1976; Fein & Stein, 1977; Jose, 1991; Olson et al., 2008; Percival & Haviland, 1978; Piaget, 1965)，この頃に公正世界信念を保持し始めるのではないかと考えられる。また，5 歳頃の児は幸運な人を好む傾向があり（Olson et al., 2006; Olson et al., 2008），幸運と不運の区別がこの年齢においても可能になっていると考えられ，当該年齢が公正世界信念の保持の転換期となっている可能性が考えられる。これらを踏まえ，6 歳児を対象に公正世界信念の発達を検討した田辺（2021）の研究において，当該年齢での公正世界信念の発達は見られず，この年齢の児はポジティビティバイアスに基づいて，他者を肯定的にとらえ判断する傾向がある可能性が明らかになった。田辺（2021）では，今後成人評定等を行い，本研究で用いた物語が公正世界信念に基づく他者評価を生起させることに十分機能しているかについて検討すること，またより高年齢の児に対して実験を行い，何歳ごろから公正世界信念に基づく他者評価を行うようになるのかを検討することを限界点及び今後の展望として考察していた。これを踏まえ，本研究では，5―9 歳児を対象に，まず幸運・不運な出来事に遭った主人公への好意度を示し，幸運な人物を好む傾向があると仮定した。また，主人公が昨日していたこと・明日起こる出来事に対する予測を示したうえで，公正世界信念の発達に関して探索的に検討した。

【方法】

本研究は，まず予備調査として成人評定を実施した。成人評定は 2 回実施され，各 40 名（調査1A：M = 34.1 歳（SD = 12.63 歳），調査1B：M = 22.95 歳（SD = 3.92 歳））を対象に実施した。登場人物に幸運・不運な出来事が起こる物語を呈示し，参加者は主人公が昨日何をしていたか，また主人公に明日何が起こるかを選択する課題を行った。本調査の結果をもとに，幸運な物語の内在的公正世界信念を問う質問では「昨日良いことをしていた」，不運な物語の内在的公正世界信念を問う質問では「昨日悪いことをしていた」，究極的公正世界信念を問う質問では「明日良いことがある」の回答が有意に多かった「くじ引きにあたる」「好きなご飯が出る」「アイスが落ちる」「自転車にぶつかってけがをする」の物語を，公正世界信念を測る課題として妥当なものとして採用した。

本実験では，5-9 歳児 130 名（各年齢 26 名，M = 7.45 歳，range = 5.00-9.83 歳，SD = 1.37 歳）と成人 26 名（M = 22.16 歳，SD = 1.68 歳）を対象に，まず児の語い年齢を測る絵画語い課題を行った。次に，登場人物に幸運・不運な出来事が起こる物語を呈示し，主人公に対する好意度（どれくらい好きか），主人公が昨日何をしていたか，また主人公に明日何が起こるかを選択する課題を行った。

【結果】

不運な主人公と幸運な主人公に対する好意度得点に差があるか，また，年齢の効果がみられるかを調べるために，年齢，物語の種類，年齢と物語の種類の交互作用を独立変数，好意度得点を従属変数，参加者 ID をランダム変数にした LMM を実施した。その結果，物語の種類の主効果と年齢の主効果がみら

れた（物語：$\chi 2$ (1) = 65.08, p < .01，年齢：$\chi 2$ (1) = 7.64, p < .01）。つまり，年齢とともに好意度は変化したものの，幸運な主人公への好意度が不運な主人公に比べて高かった。

内在的公正世界信念を問う不運・幸運な物語において，年齢間で課題の選択に差がみられるかを調べるために，年齢を独立変数，選択（0,1）を従属変数とした一般化線形モデル分析（GLM）を実行した。その結果，不運・幸運な物語の両方において，年齢の主効果がみられた（不運：$\chi 2$ (1) = 7.14, p < .01，幸運：$\chi 2$ (1) = 10.54, p < .01）。不運な物語で「昨日悪いことをしていた」，幸運な物語では「昨日良いことをしていた」を選択するようになる年齢を評価するために，信頼区間の下限がチャンスレベルである 0.5 の値と重ならなくなる年齢を計算した。その結果，不運な物語においては 7.83 歳から信頼区間の上限が 0.5 と重なり始め，本研究における最高年齢であった 9.83 歳においても信頼区間の下限は 0.5 の値と重なっていた。また，幸運な物語においては，5.33 歳から信頼区間の下限が 0.5 と重ならなくなった。つまり， 不運な物語では 7 歳後半以降「昨日悪いことをしていた」の選択がチャンスレベルと同程度になり，幸運な物語では 5 歳前半で，「昨日良いことをしていた」という選択がチャンスレベルよりも高くなった。

究極的公正世界信念を問う不運・幸運な物語においても，年齢間で課題の選択に差がみられるかを調べるために，年齢を独立変数，選択（0,1）を従属変数とした GLM を実行した。その結果，不運・幸運な物語の両方において，年齢による差はみられなかった（不運：$\chi 2$ (1) = 0.28, p = .60，幸運：$\chi 2$ (1) = 0.28, p = .60）。信頼区間とチャンスレベルとの比較では，不運な物語は 5.33 歳から信頼区間の下限が 0.5 と重ならなくなった。また，幸運な物語では，5.0 歳の時点で信頼区間の下限が 0.5 と重なっていなかった。つまり，5 歳前半の段階で既に「明日良いことがある」という選択をする児がチャンスレベルより高かった。

【考察】

どの年齢においても幸運な主人公への好意度が不運な主人公に比べて高く，Olson et al. (2006) と Olson et al. (2008) の結果が再現された。そのため，幸運な他者への選好は強固な現象であるとともに，幅広い年齢においても先行研究（Olson et al., 2006; Olson et al., 2008)の結果が再現できることが明らかになった。

内在的公正世界信念を問う課題では，不運な物語と幸運な物語の両方で発達差がみられ，不運な出来事に対しては 7 歳後半が保持の転換期であり，幸運な出来事に対しては 5 歳前半で保持されている可能性が示された。また，究極的公正世界信念を問う課題では発達差はみられず，5 歳の時点で保持されていると考えられた。内在的公正世界信念で発達的変化がみられ，究極的公正世界信念で発達的変化がみられなかったことに関しては，時間情報に関する処理能力の差が影響していたと考えられる。内在的公正世界信念に基づく判断の方が，逆方向の時間的繋がりを用いたより複雑な時間処理能力が必要であったため，究極的公正世界信念に基づく判断よりも難しく，保持の時期に差が生まれたと考えられる。また，内在的公正世界信念における幸運・不運な物語で，成人と同等の選択をするようになる年齢に差がみられたことに対しては，低特性帰属や出来事の評価に対するポジティビティバイアスが影響しており，児は物事をポジティブな側面から認識しやすかったことで，ポジティブな選択が行われたと考えられる。究極的公正世界信念を問う幸運な物語においては選択に正解がなかったものの，「明日良いことが起こる」選択をする傾向がみられたことに関しても，将来の出来事に対するポジティビティバイアスが影響したことで，幸運な他者の将来に対し，ポジティブな選択が多くみられたのではないかと考えられる。

今後の研究では，対象年齢をさらに広げ，公正世界信念の発達をより詳細に検討することや，公正世界信念の保持に関連する要因を検討することが必要であると考える。（比較発達心理学）